日本実業史博物館準備室旧蔵資料のうち「広告の部」資料について

原　島　陽　一

【要　旨】

「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」の10部門の資料のうち、「広告の部」はこれまで整理が不充分であったが、最近作成された仮目録をもとに、改めて全資料を点検した結果をまとめたものである。

「広告の部」の分類項目の設定に、若干の問題があったために、広告以外の資料が混在していることもあって、純粋に広告資料と呼べるものは494点と確認した。それらの時代的範囲は、幕末期から昭和初期までの約70～80年間に及んでいる。次に、広告の種類で分類すると、引札・ちらし・商標・略暦引札をはじめ、栞・包紙・袋・広告団扇・価格表・絵ビラ・初荷札などがあって、広告資料のコレクションとしては必ずしも多い数字ではないにも拘わらず、種類は多岐にわたっている。さらに、引札にも、錦絵仕立てのものから、粗末な活字版の小紙片まであるように、内容は多彩である。

このような広告の様式や形態から社会的な関心や成熟度を推測し得るとともに、それらの広告を利用した広告主の業種からはその時代の流行や盛衰をよみとることもできる。広告は、それぞれの時代と社会を確実に反映しているのである。ただ、広告から時代を知るためには、発行年代を明記したものが少ない広告資料について、年代推定への努力も欠くことはできない。

一方で、この旧蔵資料全体を、広告資料の観点から見なおしてみると、既に目録化された分を含めて、他の分類項目中にも多数の広告資料が混在していることを改めて確認できた。今回は「広告の部」を主対象としたことと、時間的労力的な制約のために、他部門中の分については悉皆調査できなかったのだが、それでも「広告の部」と内容が重複したり、欠落分を補完する資料を発見できた。「広告の部」資料を活用するためにも、旧蔵資料の全貌を解明できるような方策が求められる。

【目　次】

Ⅰ.「広告の部」の成立
Ⅱ.「広告の部」の概要
Ⅲ. 広告史における媒体の種類
Ⅳ. 実業博の広告資料

Ⅰ.「広告の部」の成立

現在、国文学研究資料館アーカイブズ研究系（以下、史料館と略記[1]）に収蔵されている日本実業史博物館準備室旧蔵資料[2]（以下、実業博資料と略記）のなかで、「広告の部」に分類されている資料は、これまで未整理の状態におかれ、目録も不完全なものであったが、最近になって仮目録が作成されたのにともない、「広告の部」の全体を通覧する機会を与えられたので、その概要を紹介することにした。

合せて、広告資料としての意義と、実業博資料における広告資料の位置づけについて考えてみたい。

はじめに、「広告の部」が実業博資料のなかで、どのように成立したものかを確認しておく。そのために、実業博資料全体の構成からみておくことにする。実業博資料は、資料の形態などに基いて、全体を10部門にわけて保管されている。即ち、①絵画の部、②地図の部、③番付の部、④竹森文庫、⑤古紙幣、⑥商業器具、⑦文書の部、⑧書籍の部、⑨広告の部、⑩写真の部の10部門である[3]。だが、この区分は史料館へ移管された後に編成されたものであって、博物館準備室時代の分類はこれとは異なっている。準備室時代には、全体をⓐ書籍、ⓑ図葉、ⓒ道具に三大別していた。その上で、それぞれを細区分していた。即ち、ⓐ書籍は（1）風俗、（2）経済、（3）産業、（4）雑、ⓑ図葉は（1）絵画、（2）地図、（3）統計、（4）雑、ⓒ道具は（1）農業、（2）工業、（3）商業、（4）交通、（5）金融、（6）度量衡、（7）家具、（8）服飾、（9）雑というものである。実業史博物館については、最近になってようやく設立当初の全体構想が明らかにされてきたが[4]、資料収集の方針などは、まだ不明な部分が多く残されている。上記の区分や細項目名の基準についても、それを明記した記録はいまのところ見つかっていない。ただし、各区分に「雑」項目を設定して各区分内の他項目に収容しきれないものをまとめており、細分とはいっても極めて大まかな印象が強い。それ故、ほぼ同種と考えられる資料が、別々の項目に分離している例もある。また、ⓒ道具の分類には、澁沢敬三氏を軸として実業博との所縁が深いはずのアチック・ミューゼアム編『民具蒐集調査要目』[5]で試みられた分類項目との相似が予想されるところであるが、その形跡は認められない。こうしてみると、準備室時代の分類は、資料収集過程における暫定的なものであったといえるだろう。

準備室時代の分類が暫定的なものであったとして、それならば史料館へ移管後の分類が大きく改善されたかというと、必ずしもそうではない。ここで改めて、準備室時代と史料館移管後の分類を比較してみると表1のようになる。

表1をみると、一見してわかるように、旧分類の表現を変更したり、一部の細項目を独立させたりしたものに過ぎず、全体を見直して再編成した結果でないことは明白である。表1をもう少し詳しく比較してみると、最も大きく変更されたのはⓑ図葉である。ただし、（2）地図はそのまま②地図となり、（3）統計は③番付と名称を変えて、それぞれ細項目を独立させたに過ぎない。（4）雑だけが、ⓐ書籍の（4）雑と一体化させることによって、⑦文書と⑧書籍を構成するという、旧分類の大区分を超えた移動となっている。残る（1）絵画は、①絵画、⑨広告、⑩写真へと三項目に分割されており、本稿の対象と直接関係するものである。このうち、写真については、確かに素材や表現形式が絵画とは別の様式であるから、これを分離独立させたことは、理論的にも技術的にも妥当である。しかし、広告については疑問があるが、この件は後に改めてとりあげる。

1）この資料が財団法人龍門社から寄託され、さらに後年それが寄贈された時の対象が文部省史料館であり、整理や一部の目録化が同館において実施された経緯を考慮して、一般にわかり易いように史料館の呼称を用いることにした。

2）本来ならば日本実業史博物館について説明すべきであるが、本稿の目的からは冗長になるので省略する。同館の概略は『史料館収蔵史料総覧』（史料館編、1996年刊）269頁～271頁を参照されたい。また、筆者も『明治開化期の錦絵』（史料館編、1989年刊）の解題で、その沿革を説明している。

3）このうち①から④までは『史料館所蔵史料目録』第十一集（1965年刊）に、⑤は同目録第五十七集（1992年刊）に、それぞれ目録化されている。

4）例えば五十嵐卓「澁沢敬三が描いた日本実業史博物館」（史料館報七八号、2003年刊）、青木睦「日本実業史博物館構想のもとに収集された産業経済資料の基礎的研究について」（同前八十号、2004年刊）

5）『民具蒐集調査要目』（アチック・ミューゼアム編、1936年刊）

表１．実業博資料の分類項目の変化

準備室時代		史料館移管後
a 書籍	(1) 風俗 (2) 経済 (3) 産業	⑧書籍
	(4) 雑	⑧書籍 ⑦文書
b 図葉	(1) 絵画	①絵画 ⑨広告 ⑩写真
	(2) 地図	②地図
	(3) 統計	③番付
	(4) 雑	⑦文書 ⑧書籍
c 道具		⑥商業器具
(竹森文庫)		④竹森文庫
(古紙幣)		⑤古紙幣

表１の、図葉以外の項目について簡単にふれておこう。ⓐ書籍は、細区分を撤廃して⑧書籍と⑦文書とに二分している。両者の区分は印刷物であるか、手書きの記録であるかが原則的な基準であったと考えられる。もともと、ⓐ書籍の細分項目は決して妥当な選定ではなかったから、撤回した後に再構成を計る方針は適切な処理といえる。それよりも、書籍から文書を分離したことに注目したい。表１では、図式を簡明にするため、⑦文書へは（4）雑の一部が抽出されたように示したが、実際には（2）経済と（3）産業から⑦文書へ移し替えられたものがある。ただし、その量は（4）雑から移されたものが圧倒的に多い。なお、前述したⓑ図葉の（4）雑からも一部が⑦文書へ編入されている。では、何故に書籍から文書を分離させたのであろうか。現時点では極めて妥当と見られる分離であるが、準備室時代にこうした発想はなかったと思われる。それは、⑦文書が旧分類の複数の項目から集められていることからも窺うことができる。他の新旧項目が、単純な名称変更や、分離独立であることと比較したとき、準備室時代の分類概念に“文書”が存在していなかったことは明らかである。それが、“文書”を独立させることになったのは、実業博資料が史料館に寄託され、さらに後年に寄贈されるに至った経過と深く拘っていたように思う。近世～近代のいわゆる“文書”資料を収集し、日常的にそれを取扱う現場に居合せたことが、⑦文書を成立させたと考えるのは、あながち筆者の偏見ではないと確信している。

次に、ⓒ道具から⑥商業器具への変更については、名称に疑問が残る。この項目内の資料は、冒頭に記した準備室時代の細区分項目から推測できるように、農業や工業など商業以外の分野に及んでいる。それらを包含した実体のままで、名称だけを商業に特化したことは、たとえ商業関連の器具が多いからといって、納得の得られる措置ではなかろう。

竹森文庫と古紙幣とは、当然ながら準備室時代から所蔵されていたが、前記の目録とは別個に取扱われていたと推測される。このうち、竹森文庫は、竹森一則氏が『索引政治経済大年表』を著述する資料として収集したコレクションを、澁沢敬三氏が購入して実業博へ寄贈したものといわれる[6]。購入の時期が昭和19年（1944）と、他の収集資料より遅くれていること、また約1500点とまとまっていたことに

6）前出（3）の『史料館所蔵史料目録』第十一集の解題による。

よって、前記のⓐ書籍へ編入せずに独立の取扱いにしたものと考えられる。一方の古紙幣の取扱いには謎が多い。現状から推測すると、二種類のコレクションを収集したようであるが、入手経過などは明確でない。ただ、竹森文庫と同様に、他人のコレクションを一括して入手したために、別個の取扱いにしたとも考えられる。しかし、他の資料については在庫点検を繰返しながら、古紙幣だけは放置されていた[7]。それだけでなく、史料館へ移管後もほとんど表面化されることはなかった。2600点余のコレクションを入手しながら、これを核として古紙幣を体系的に収集する意図は見出せない。少数の古紙幣を断片的に収集したものが、ⓑ図葉の（4）雑などに混入しているが、古紙幣コレクションとの接点はない。いずれにしても、古紙幣の収集には、その後の取扱いを含めて、何か他の要因がかくされていたとの憶測さえ生じさせるものがある。

実業博資料の全体像を把握するために、資料の分類項目を紹介し、準備室時代と史料館移管後の項目名の変更をみてきた。たしかに、移管後の方が、所蔵資料の全体を包含できているし、名称を変更したことで解りやすくなった点があることは認められる。だが、移管後の変更が根本的な解決になっていないのも残念ながら認めざるを得ない。そのなかで、本稿が対象とする「広告の部」の設定には、大きな疑問がある。表１で示したように、実業博資料の分類項目名は、すべて資料の素材や表現様式を基準としている。ただし、竹森文庫は、素材や様式でなく別個の基準で分けられているが、これはそれなりの正当性をもつとみてよかろう。これに対し、広告というのは資料の内容による区分で、明らかに分類基準が異る。その上、この異った分類基準を全資料に対して適用せず、一部分だけに適用したことで、不都合が拡大してしまった。表１で示したように「広告の部」は、ⓑ―（1）絵画のなかの広告資料を抽出して独立させたものである。このため、他の項目中の広告資料は、そのままとり残されて、分離した状態となってしまった。こうした結果になることは容易に予測できたはずなのに、何故「広告の部」を設定したか、真意は不明である。(1) 絵画の内容が、錦絵を中心とした絵画以外に、引札や写真などで構成されていたから、それらを区分して絵画を独立させようとした意図は理解できる。だが、絵画から除外したものを、引札＝広告と安易に決定したところに問題があったようにもみえる。次節で詳述するように、「広告の部」には広告以外の資料が一割以上も混入している。さらに、引札には錦絵の形式を用いたものがあって、両者の区分は容易ではない。実際、①絵画のなかに引札風の錦絵があるし、逆に本来なら①絵画に残すべき作品が「広告の部」にあったりして、分類を再編した時点で個々の資料の選別に厳密な検討が加えられたかにも疑問が残る。

実業博資料のなかで「広告の部」が成立した経緯は、概ね以上のようである。不可解な点も多いが、いまとなっては解明する手がかりもないので、現状の「広告の部」をそのまま肯定した上で、その内容を以下に紹介していく。同時に、実業博資料全体のなかの広告資料についてもふれることにしよう。

II.「広告の部」の概要

「広告の部」の成立事情は、前節に記したようなものであった。内容の詳細は後掲の『広告の部目録』を参照していただくとして、内容の概要を紹介しよう。始めに「広告の部」の数量を確認すると、これが意外に複雑である。最近になって史料館が作成した仮目録の番号は291となっている。ただ、この中には同一番号に複数の資料を含むものがあるので、それらを加算すると総点数は566となって、仮目録番号の約２倍に達する。しかし、これには、本来なら他の項目に分類されるべき広告以外の資料72点が

7）前出（3）の『史料館所蔵史料目録』第五十七集の解題による。

混入しているので、純粋な広告資料は、総点数からこの分を差引いた494点ということになる。

この494点を、目録の表題によって広告の種類別に分類して数量の多いものを挙げると、引札類165、ちらし17、広告17、略暦引札27、商標・ラベル201である。この合計は427点となり、広告資料の86%を占める。この数字は、「広告の部」が旧分類のⓑ（1）絵画から分離独立した経緯から考えると、当然の結果といえるだろう。

ここで、上に使用した名称について説明しておく必要があろう。それは、引札とちらしと広告は、時に同義語として扱われることがあり、その区分は明確とはいえないからである。近世以降の広告史の沿革については次節で述べるので、ここでは簡単に要点を記すと、近世には、紙に文字を記した形態の広告は、報条・引札などと呼ばれ、なかでは引札が代表的名称として用いられた。もっとも、江戸の引札に対し、京坂ではそれをちらしと呼んだという説があり[8]、これだと両者は地域差による表現ということになる。ところが現在になると、新聞の折込広告や街頭で配布する広告紙をちらしと呼ぶことが一般的となった。一方で、広告は明治以後に登場した用語であるが、それまでの引札に代る個々の広告をさす用語としてだけでなく、広義の広告全般をさす用語として使われ、しかも明治中期には両者ともほぼ定着したようである。このような状況を前提として、「広告の部」に収容されている資料の年代にも考慮して、表題には引札を基本的名称に採用した。ただし、大正～昭和期に発行された小形の広告紙に限って“ちらし”の名称を付与し、広告の本文中に“広告”の文字を使用しているものは、時代的用例を示す意味で、そのまま“広告”を採用したのである。これ以外はすべて引札と称することにしたが、本文に報条・口条・広条などとあるものは、右の“広告”の場合と同様に、そのまま表題に採用した。前記の種類別点数の表示に、引札類としたのは、“ちらし”と“広告”以外の、報条などを含む残りの引札という意味である。

次に、略暦引札というのは、引札に略暦の機能を収載したもので、今日、企業が発行する広告カレンダーの前身のようなものである。略暦の隅に店名などを挿入しただけの簡単なものは、すでに幕末に出現していたようである。これと類縁のものに、火の用心と大小月を組合せたものがあって、配り物として使われていた。ところで、略暦引札を、従来は広告暦[9]または引札暦[10]などと称しているが、いずれも定着してはいない。ただ、岡田芳朗氏が指摘したように、紙面の比率からみて引札付略暦と略暦付引札の二種類が存在するのに、従来の名称は暦の方に重点をおいている感が強い。しかし、実用面は別として、発行者の意向はあくまでも引札にあったはずだと考えられるので、引札を主名称とし、使用される暦は多くが略暦であるから“略暦引札”という名称をあえて造語したのである。個々の資料表題に「○○年略暦引札」とすれば、表題が内容を的確に表現できる付随的効果もある。後節でも述べるが、実は引札やちらしで発行年を確定できるものは少ない。稀に年代が判明する場合も、発行年が明記されていたからではなくて、有名店の開業や博覧会への出店、あるいは本文中の関連記事を検証することによって推定した結果が多いのである。そうした中で、略暦引札は略暦がついているお蔭で年代を確定できる極めて特異な存在なのである。

商標とラベルは、商品の容器あるいは箱などに貼付するものであるが、数量では輸出用日本茶のものが152と圧倒的に多い。ほかには、烏龍茶15、菓子15、酒13、その他6となっているが、この数値は資料収集時の偶然的な要因によるものであって、実際の発行量の比率を反映したものではない。ただ、開港後の幕末から明治期前半において、製茶が輸出品目の重要な物産であったことは事実である[11]。

8）『類聚近世風俗志（守貞漫稿）』（更生閣書店、1934年十版）十六、581頁

9）増田太次郎『引札絵びら錦絵広告』（誠文堂新光社、1976年刊）40頁

10）岡田芳朗『明治改暦』（大修館書店、1994年刊）222頁

右の五種の資料は、広告資料として誰もが想定できるような種類であって、いわば主流の広告であるから、量的に全体の86%を占めるのは当然といえる。残りの14%は、同種のものがまとまった形で収集されてはいないが、広告資料の形態として欠かせないものや、一般には広告資料とみなされずに見逃されているものがあるので、以下にそれらを紹介しておこう。

栞・包紙・袋は、形態は同じでないが、いずれも引札の延長線上にあるものといってよいだろう。それぞれの仕様は多彩であって、外見的に共通性は見えにくいが、案外に性格は近い。それは、包紙を折りたたんで一部を糊づけすれば袋になるし、逆に袋を切り開けば一枚の包紙に変身する。実際に、袋の内側に文字を印刷して、後で開封して利用できるようにしたものがある。包紙や袋の一部分を切り取れば栞になる。引札との関連では、例えば市販薬の袋に、薬品名や用法のほかに、由来や効能を細ごまと記したものに代表されるように、その部分をみれば引札と同じである。商品を収納する本来の機能に、広告要素を付加したものといえるだろう。ただし、多くの引札が不特定多数の人々を対象とするのに対し、栞などは商品の購入者あるいは利用者に直接渡るところに特色がある。もっとも、この特色が広告の対象者を特定できる反面、宣伝の波及効果が限定される弱点ともなる。

価格表は広告資料と見なされ難いが、安売りの引札が引札の根元といわれるように、顧客に一定の価格を提示して購入利用を促す意味では、広告資料と認めてよいであろう。

広告団扇は、1960年代ころまでは残っていたと思われるが、団扇そのものが激減した現在では殆ど姿を消してしまった。ここに残っているのは、団扇に成形したものではなく、地紙の状態のものである。当然ながら表と裏の二枚一組となるが、地紙は団扇の形になっておらず、四角の紙であるから、将来は使途不明になることも予想される。

絵びらは、明治期にポスターへ発展するが、発生的には引札と看板を合成させたような性格といえるだろう。主に屋外への掲示用として使われたのも看板と共通するところがある。

初荷札は、11枚中の10枚が見本であるが、元来が消耗品のため残存例は多くない。印刷所が用意した見本型に店名などを注文して完成する形式は、正月用引札などと同じ手法であるが、正月用引札はある程度残っているのに比べて、初荷札は実用性が高いこともあって完成品としては残りにくかったといえよう。

ここで、以上の「広告の部」資料全般の広告主の業種分布についてみておこう。数字の上で最も多いのは茶業の174であるが、このうち170は輸出茶のラベルなので、これを別格として除外すれば、食品関係48、菓子40、陸海運輸37、薬種25、化粧品・小間物16、旅宿13、衣料品11などが、業種として多いものである。このうち食品関係は、食料品全般を扱う店から、乾物・海産物・佃煮などの個別の商品を扱う店までを合計したので、個々の業態に分割すると、料理屋の10店が最大で、その他は一桁の数字になる。陸海運輸も同様に、船宿・廻船・川船などに分かれている。その点、菓子と薬種は単独の業態としてまとまったものである。広告利用の業種は、年代によって変化しており、総数500点弱の本資料から安易に結論は出せないが、明治前～中期の広告界で上位にあった売薬・食品・化粧品[12]が、前記の業種と重複するのは、流通量に比例した結果であろうか。右に挙げたもの以外にも、柳こうりやかもじなど今では珍しい業種や、勧工場・遊園地・銀行など新時代を反映したものもある。詳細は目録を参照してほしい。

11）松本剛『広告風俗帳』（書苑、1970年刊）に開港後の輸出茶をポスターの挿画入りで紹介（10頁）している。なお、明治期における輸出品の第一位は生糸であったが、明治7年の輸出金額では、生糸の530万円を抑えて、製茶は725万円であった（朝日新聞社編『日本経済統計総覧』1930年刊、242頁、247頁）。

12）内川芳美編『日本広告発達史』（電通、1976年刊）上、91頁

最後に、「広告の部」に混入している広告以外の資料について簡単にふれておきたい。本節の冒頭に記したように、「広告の部」の総数566点には広告以外の資料が72点含まれている。それらを種類別にして挙げると、絵画系33、写真18、瓦版５、文書５、図書雑誌４、戯文２、以下地図・番付・双六・由緒書・時刻表各１となる。このうち、例えば錦絵の『諸国名所百景』（目録№109）は①絵画の部にあって少しもおかしくないように、それぞれの性格に従って、①絵画、②地図、③番付、⑦文書、⑧書籍、⑨写真へ編入しても、全く支障のないものである。むしろ、本来ならば、その方が自然の姿だったはずである。従って、実業博資料を利用する際には、前記72点に注意して併覧する必要がある。これは利用者にとって不便であるが、今更別項目へ分割することも困難な事情があると推定できるので、せめて関連する項目内に参考資料として併載するなどして、検索の便宜を考えてほしいと思う。

Ⅲ. 広告史における媒体の種類

実業博資料の「広告の部」が、日本広告史研究にどの程度寄与できるかを考えるために、日本広告史を簡単にふり返っておこう。広告媒体が時代とともに発展し多様化をつづけて今日に至り、将来はどのような媒体が出現するか予測もつかない。ここでは、「広告の部」資料の収録年代に合せて、近世末から昭和初期までの約70～80年間に限定して、広告界の動向を確認することとする。

日本における近世の広告媒体が、看板および暖簾と引札を主流としていたことは、ほぼ定説となっている[13]。ただし、この３種が固定的な一形式で続いていたわけではない。例えば看板は、素材・様式・掲示場所・掲示方法などによって多様な形態が工風されていたし、引札も手書きのものから単色印刷へ、さらに多色刷となって絵画的要素を加えるなどこれまた多くの形態を生み出した。普及度としては前記の３種と比較にならないが、近世には意外なほど多様な広告が知られている。書店の在庫目録である書籍目録は1670年に刊行が始まっているし[14]、図書の奥付に同じ書店が出版している本の広告を載せたのも早かった。文学や芝居の中に広告を挿入する手法もあった。俄か雨に越後屋が貸し出した店名入りの貸し傘は、開始年代は不明ながら、18世紀中期にはこれが話題となっているから、当時としては斬新な広告であり、効果も抜群であったといえよう[15]。一般の広告史では扱われることが少ないが、売り声などの音声広告も多彩であった[16]。街路を歩きながら商売する振売商人は、取扱商品や地域ごとに特定の売り声をもっていた。なかには声でなく、太鼓や鉦の鳴物を使ったり、風鈴売りにように商品が発する音を利用するものもあった。

近世の広告が、右のように盛んであったのは商業の発展が背景になっていたわけであるが、近代になると商業活動の飛躍的な進展に対応して、広告媒体も急速に増大し、新しい媒体が次つぎに登場した。主要なものだけでも、新聞広告、屋外広告（交通広告、電柱広告、野立広告）、楽隊広告、折込広告、宛名広告などがある[17]。楽隊広告は、幕末に始まったとういう東西屋があるので[18]、純粋に新登場とはいえないが、新聞や鉄道や電柱などはその存在自体が新しく出現した媒体だったのである。さらに、こ

13）同前　７頁～12頁

14）斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』（井上書房、1962年刊）に復刻されている。

15）豊泉益三『近代世態風俗誌』（三越宣伝部内、同刊行会、1951年刊）179頁

16）遠藤武『図説広告変遷史』（中部日本新聞社、1961年刊）57頁～68頁

17）前出（12）『日本広告発達史』

18）『風俗畫報』二二九号（東陽堂、1901年刊）６頁。なお、『広告大福帳』（1905年刊）によれば東西屋は1845年に出現したという（前出（12）『日本広告発達史』16頁）。

れらはそれぞれに細分化して、例えば交通広告では、車内・つり革・切符・駅構内などと拡大していくが、「広告の部」資料には含まれていないので、詳細は省略する。

新しい広告媒体が登場しても、前代からの引札や看板は引きつづき利用された。そのなかで、引札に銅版画や石版画を導入したり、琺瑯製の看板を造るなど、新しい技術や手法を積極的にとり入れている。「広告の部」で引札が主力となっているのも、近代以降も引札が広く活用されていたからにほかならない。ここで、引札について独自の分類法を案出した増田太次郎氏の説を紹介しておこう。自らも多数の引札類を収集していた同氏は、引札などの広告を“散らす広告”と定義し、引札、ビラ、摺物、暦、うちわ、商標に分けて、時代とともにそれらが展開して一つの系譜を形成したとみている[19]。ただし、系譜図のなかで、引札を、A商標（ラベル）、B包紙・紙袋、C商品目録、D宛名つき引札の四種に展開したと図示しているが、一方で“引札の周辺にあるもの”として、配り物、見立番付、領収書、紙袋・包紙、栞、商標・レッテルを挙げている。両者には共通のものがあって、独自に展開したものか周辺のものが独立したというのかが判然しない。このように若干の不透明さはあるものの、実物を通して得た結論という安定感がある。周辺という表現には、引札を中心にした考え方と、広告としての認知度の低さへの配慮があったとも考えられる。しかし、包紙や紙袋は、記事の部分を取り出してみれば、引札と少しも違わない性格をもっているわけで、広告の一端を荷負っていることは前節で述べたとうりである。周辺の一つに挙げている領収書については、すでに水田健之輔氏が“宿かり広告”として提案している[20]。水田氏が“宿かり広告”に挙げているのは、封筒、便箋、請求書、仕切書、見積書等で、領収書の名称はないが、同列のものとして「等」のなかに含まれているとみて差支えないであろう。水田氏が“宿かり”と称したのは、第一義的な使用目的とは別に、副次的な効果を広告に利用している点に注目したものである。この意味では、包紙や紙袋もまた“宿かり”の一種ということもできる。しかし、水田氏は、包装紙広告を“宿かり”に含めず、マッチ広告などと並べて独立の媒体として認めている。これは、すでに明治中期に包装紙を広告媒体と捉えようとする機運を受けて[21]、包装紙が独立した媒体に昇格していた実体に接していたからであろう。因に、それから約30年後の1955年には、包装紙を“歩く広告”と認識するようになった[22]。

増田氏は“系譜”にも“周辺”にも加えていないが、本文の記事中で、千社札と納手拭について“広告媒体といえないことはない”[23]と指摘している。千社札を、増田氏は“半分遊び半分広告”と認めているが、広告か否かの基準は広告主の性格にあると考える。商店や芸能人の千社札には広告の要素があるが、無名の個人の千社札は単なる趣味であって、広告とはみなせない。売名行為も広告だというのは、広告概念の逸脱であろう[24]。従って、千社札は一律に広告といえないと思う。これに対し、納手拭は同じく社寺を対象としたものであるが、専ら商家が広告用に利用したので広告媒体に追加してよいだろう。

明治～昭和初期に登場した新媒体は多いが、「広告の部」資料と無縁のものに紙幅を割くのも如何と思われるので、この他は省略する。ただ、省略したなかで、マッチのレッテルや手帖などは、「広告の部」の収集対象となり得たはずなのに、欠落しているのは残念である。

19）前出（９）『引札絵びら錦絵広告』40頁
20）水田健之輔『本朝商業広告史』（巌松堂書店、1928年刊）212頁
21）前出（12）『日本広告発達史』239頁
22）西川友武『広告往来』（学風書院、1955年刊）131頁
23）前出（９）『引札絵びら錦絵広告』38頁
24）寛政11（1799）年に幕府は千社札の流行を規制し、江戸でも町中に対し“宜からぬ事”としてこれを禁じた（近世史料研究会編『江戸町触集成』第十巻（塙書房、1998年刊）、一〇七二八番、339頁）。

Ⅳ. 実業博の広告資料

前節で概観した日本広告史の流れに照応させて、「広告の部」の内容を点検すると、500点弱というこの種の収集資料としては、必ずしも多いとはいえない数量のわりには、多岐にわたる種類の資料が集められているといえるであろうか。そこで、これらが広告史研究にどのような意義をもつかを考えてみたいと思うが、実は、実業博資料には「広告の部」以外にも多くの広告資料が含まれているので、それらを総合しないと正当な評価は下せないのである。第一節で指摘しておいたように、実業博資料の分類は、資料の素材や表現様式によって区分していながら、「広告の部」だけが資料の内容による分類であって、他の分類基準と一致しないという不合理性をもたらした。この不合理性を克伏するためには、他のすべての分類項目から広告関連資料を抽出して、「広告の部」へ集中させることによってのみ解消することができる。しかし、残念ながらそのような措置はとられなかった。従って、実業博資料によって広告関連の資料を調査しようとするなら、「広告の部」以外の資料をも対象としなければならない。いま、実業博の全資料を総点検する余裕はないので、とくに注意すべき項目を挙げるなら、①絵画、③番付、⑥商業器具、⑧書籍の四部門である。

まず「絵画の部」[25]では、特定の商家や人物の錦絵や、双六の一部には広告の要素をもつ作品がみられる。「番付の部」[26]の名家自慢や資産一覧などのなかには、格付けが公正な基準で実施されているか疑わしいものを含めて、広告として扱えるものが混入している。

次に、「商業器具」のなかにある約200点の看板は、実業博資料の広告資料として注目すべきものである。日本広告史で、近世における広告媒体の主流が看板と引札であったことは前節でふれたが、実業博資料の看板は、看板の実物コレクションとして、日本国内で最も有力なものの一つといえるだろう。一体に、看板を資料の分野別で分けると民俗資料に分類される。ところが、日本では民俗資料への学問的関心が遅れたために、本格的な収集活動は1950年代後半にようやく始まった情況であり、看板もその例外ではなく、良質なコレクションは多いとはいえない[27]。逆に、明治期に海外へ流出したものに注目されるものがあったりする[28]。このような状況下にあって、実業博資料の看板は、質量ともに一定の評価を与えてよかろう。

「書籍の部」は、総数で6000冊以上に達するので、一点ごとの精査でなく、カード目録上の書名から推定して抽出しただけであるが、広告に関連があると認められる資料として178点を見出した。この中には、同番号に複数の資料をまとめているものがあるので、総計では293点となる。さらに、１冊の中に引札や商標などを貼込んだ貼込帳が28冊あって、多いものは１冊に300枚以上も貼込んである。貼込まれた資料を個別に数えると3805点となり、これだけでも「広告の部」資料の約８倍に達する。ただし、貼込帳には広告以外の、例えば宗旨証文、紙札、コレラ流行の注意書、競馬観覧証、筒粥神事占記など雑多なものがあって、すべてが広告資料に追加されるわけではない。とはいえ、大半は引札や広告を中心としたものであって、「広告の部」資料と性格的には酷似した内容である。しかも、数量は前記のように「広告の部」よりはるかに多いので、これを見落とすわけにはいかない。むしろ、同じ収集資料に

---

25) 目録は前出（３）『史料館所蔵史料目録』第十一集に収録されている。

26) 同前。

27) 昭和前期には杉浦三郎兵衛（丘園）が収集した看板が知られ、その一部は同氏編『家蔵看板図譜』（雲泉荘山誌　巻五、1940年刊）に収録されている。しかし、後年このコレクションが転売の過程で減少したことは林美一『江戸看板図譜』（三樹書房、1977年刊）333頁～334頁に詳しい。

28) 例えばＥ・Ｓ・モースが1877～1882年に収集したものがある。『幕末・明治KANBAN展』（日本テレビ放送網・読売新聞社、1984年刊）、『モースの見た日本』（小学館、1988年刊）参照。

属するのだから、たまたま分類項目が違っても、両者は一体化して取扱うべきであろう。前節で試みた広告資料としての種類別項目を比較しても、主要な引札、ちらし、広告、略暦引札、商標などはもちろん、栞・包紙・袋や価格表など項目分布もほぼ一致する。

以上に述べてきたように、実業博資料の広告資料は、「広告の部」のみにとどまらず、少なくとも上に掲げた各部に分散している関連資料を綜合的に活用することによって、全貌を把握することができる。これらを合計すると約4000余点に達するであろうが、引札や看板という主流的広告媒体のほかにも、包紙や袋、栞や価格表を始め、一般には保存されていない傍系資料までが幅広く集められており、幕末から明治期の広告資料として、一応まとまった資料群といってよいであろう。

ただ、そこにはいくつかの問題を抱えていることも見逃せない。広告は、その時代と社会を反映するものであることは、改めて指摘するまでもないであろう。引札やちらしも当然その枠内にあり、ちらしを通して経済動向を探れば、常とは違った姿も見えてくる[29]。そのためには、資料が時代を正確に伝えていなければならない。だが、本資料でも中核となっている引札類は、その大半が発行年月日を記載していないことは前にもふれた。売出し用のものには“来る○日より”などと日付を記したものはあるが、そこから年代を推定できる確率は極めて低い。とはいえ年代不明のままでは資料の価値は十分に発揮できない。正確な年月日には至らなくても、推定年代の幅を狭めるように傍証していく努力が欠かせないのである。

看板についても、確かに日本で有数のコレクションではあるが、難点がないわけではない。それは、各個体に収集記録がつけられていないのである。最近になって、実業博資料の収集記録が一部分ながらその存在が明らかになったというが、購入先の古道具店などが判明することはあっても、民俗資料に不可欠である収集地や旧所有者名などを明示できる記録には至らないであろう。ある意味で、これは致命傷であるが、少しでも解明されることを望みたい。

明治以後における広告を語るためには、実業博資料の広告関連資料だけでは不十分なことはいうまでもない。特に、近代広告の中心的媒体となった新聞広告や、実物資料の残存が困難な屋外広告（野立看板や電柱広告など）の調査は、研究を充実させるためにも欠くことはできない。だが、それらは実業博資料と直接関係する問題ではないので、別途に解明すべきであろう。ここでは、実業博資料のうち目録化が遅れている部分の整理作業を少しでも早く完了させることを望みたい。それによって、場合により項目が分離している資料を相互に参看し、綜合的に利用することが可能になるはずである。それによって、ここに紹介した「広告の部」の資料が、現状では陰れていた部分をあらわして、存在意義を一層高めることにつながるのである。

29）澤田求・鈴木隆祐『チラシで読む日本経済』（光文社新書、2001年刊）

日本実業史博物館準備室旧蔵資料のうち広告の部目録

仮番号	表　題	発行年月日	発行者‖発行者住所	出版人‖出版人住所	印刷様式	画家‖作者	数量
1	明治十六年略暦引札	明治15年11月13日御届	和漢洋薬舗　木舟衛三　□近江屋‖愛知県名古屋区本町三丁目八十三番邸	編集兼出版人柴田竹三郎‖名古ヤ八百ヤ町	色刷		1枚
2	濃勢汽船会社広告	明治15年２月	濃勢汽船会社		色刷（木版）		1枚
3	日本郵船株式会社汽船号	明治	日本郵船株式会社荷扱問屋□万年屋久七　万年屋支店　万年屋出張所‖東京京橋区西紺屋町　日本橋区小伝馬町三丁目　江戸橋郵船会社構		1部色刷（四周に茶色の鎖模様、右上に赤2線の旗、左下に黒色で碇、店名下に朱印）		1枚
4	日本郵船株式会社汽船号	明治	□菅野回漕店‖大阪東区平野町壱丁目		四周に赤色の2線入り（左裏に小川の小丸朱印あり）		1枚
5	火災消防器械之絵図	明治	本家□龍吐水製造所　柿沼丈吉‖栃木県安蘇郡飯田村百二十九番地		墨刷		1枚
6	東京横浜往返蒸気弘明船招帖	午（明治3年）7月11日より	荷物運輸所　三河屋徳兵衛、但馬屋金治郎、松坂屋宇右衛門‖水代橋下、大川端町　築地大波止場向　南新堀一丁目河内屋徳兵衛前蔵ニ而		一部色刷（木版）		1枚
7	泉回漕店引札	明治	泉回漕店（商標は三ツ輪つなぎ）‖伊豫三津栄町		木版色刷		3枚
8	日本茶ラベル	明治			色刷		1枚
9	切昆布ラベル	明治	□‖大阪		色刷	豊貞画	1枚
10	清水多輔店引札	明治	清水多輔‖尾張国名古屋船入町		木版印刷	年々居春近画	1枚
11	永楽屋引札	明治	永楽屋中川佐助‖名古屋本町通り十三丁目西側		色刷（木版）		1枚
12	金具屋豊蔵店引札	明治	金具屋豊蔵‖大坂東船町		木版色刷		1枚
13	明治廿二年略暦引札	明治21年11月６日印刷同月８日出ハン	萬屋平六事（□）　萬屋竹治郎‖名古屋住吉町	ヘンシフ及発行印刷者兼加藤新太郎‖アイチケン名古ヤ区ヤ八丁二切三百七十一ハン戸	木版色刷		1枚
14	引札雛型	明治			色刷木版	蝸山写	1枚
15	楽善堂広告錦絵	明治	岸田吟香‖東京銀座ニ丁目		木版色刷	鮮斎永濯（彫銀）	2枚続き
16	魚がし水神祭図	明治		神田伊勢辰版	木版色刷		1枚
17	（輸出用日本茶ラベル）	明治			色刷		6枚
18	間坂伊兵衛店図	明治	間坂伊兵衛‖川越喜多町		木版色刷	年昌画	1枚
19	貴田村運送店ポスター	明治	貴田村運送店‖大阪梅田駅前	笑鶴堂‖大阪南区湊町停車場前南	一部色刷		1枚
20	（西洋木工機械見世物引札）	慶応2年4月		越前屋嘉七	墨刷	錦江斎春艸（彫工　片田長治郎）‖引札文作者：仮名垣魯文	1枚
21	商船運送引札	明治	蒸気船乗組運送所　舩井長三良‖神戸西海岸通り		1部色刷		1枚
22	牛痘苗広告	明治28年１月10日発行	日本衛生新聞社‖東京市神田区三崎町壱丁目六番地		木版色刷		1枚
23	東京屋浅田店引札	明治25年	東京屋　浅田店‖大阪心斎橋筋塩町角		1部色刷	藍月‖引札文作者：宇田川文海述	1枚
24	加賀屋硝子店引札	明治	加賀屋熊崎安太郎‖東京日本橋区通塩町十三番地		墨刷		1枚
25	布屋引札	明治	布屋事　和井田藤三郎	中澤堂‖北久太良町心斎橋筋	木版色刷	善栄画	1枚
26	中屋六太郎店看板ビラ	明治	中屋六太郎‖東京日本橋区本石町四丁目		色刷		1枚
27	増井商店看板ビラ	明治	増井米太郎‖東京横山町三丁目		色刷		1枚
28	獅々印　金剛石磨看板ビラ	明治	東京近文		藍地に白抜文字		1枚
29	文寿堂看板ビラ	明治	松屋豊造‖東京通塩町		1部色刷		1枚
30	安川晃栄堂看板ビラ	明治	安川晃栄堂‖東京日本橋区上槙町		1部木版色刷		1枚
31	大隈源助店引札		大隈源助‖江戸浅草芳町弐丁目		墨刷		1枚
32	保険附汽船号	明治	内外国貨物回漕問屋　吉田平回漕店‖大阪市東区唐物町東堀		1部色刷		1枚
33	清風堂引札			芝神明前、若与	錦絵	広重画	1枚
34	三井呉服店ポスター	明治37	三井呉服店‖東京日本橋区駿河町		錦絵		1枚
35	船宿引札	明治	吉田屋藤兵衛‖いせ山田川さき港船場		墨刷		1枚
36	蚕業器械販売広告	明治23年６月７日	蚕業方械社‖東京市本郷区駒込追分町二十番地		石版		1枚
37	摂河紀糸紡織総売捌所	明治	橋本又治郎‖大阪北堀江通三丁目		錦絵	芳峰	1枚
38	造船所広告	明治11年	川崎正蔵‖東京築地南飯田町九番地	大阪新報社‖（大阪）今橋二丁目	活版		1枚
39	金毘羅出船所案内図		平野屋佐吉‖大阪さかい筋長堀橋南詰		色刷	香月斎玉峰	1枚
40	福島組引札	明治	福島組‖大阪南区安堂寺橋通壱丁目百七十二番屋敷		色刷	春盛	1枚
41	高野商店引札	明治	高野商店‖東京市京橋区南伝馬町壱丁目		錦絵	年方画	1枚
42	（現物なし）						0

仮番号	表　　題	発行年月日	発行者‖発行者住所	出版人‖出版人住所	印刷様式	画家‖作者	数量
43	安川商店引札	明治	安川商廛‖日本橋区本銀町二丁目九番地		色刷		1枚
44	彗星石炭油引札	明治			墨刷		
45	共進館売出広告	明治	共進館‖神田区裏神保町六番地	引札広告呼人配人請負所書籍行商社‖神田末広町三十五番地	色入り		1枚
46	鶏肉ケレー引札	明治	鶴岡市太郎‖東京第壹大区拾壱小区神田通新石町三番地		墨刷		1枚
47	（農書小知識）		大垣漆音蔵‖三河国岡崎		墨刷		1枚
48	（農書小知識）		大垣漆音蔵‖三河国岡崎		墨刷		1枚
49	吉田鉄物店広告団扇用紙	明治	吉田房吉‖埼玉県栗橋町		色入り	玉英	2枚
50	尾張町ほていや引札		ほていや善右衛門‖江戸尾張町		墨刷		1枚
51	旅宿案内状				墨刷		3枚
52	伊吹山陳熱艾包紙		釜屋　治左衛門‖江戸小網町三丁目		墨刷		2枚
53	栃屋栃兵衛店引札		栃屋栃兵衛‖栃木中町		木版色刷	一勇斎国芳‖引札文作者：式亭小三馬	
54	剣煙草売出引札	明治	岸本店‖大阪南久宝寺町中橋南へ入		墨刷		1枚
55	はりまや引札	明治	はりまや源蔵‖大坂四ツばし西南詰少南へ入		墨刷		1枚
56	越後屋引札	明治７年	越後屋‖東京駿河町		墨刷		1枚
57	でんぼうや喜兵衛書状		でんぼうや喜兵衛‖大坂宿長町八丁目		色模様入		1枚
58	紺利広告	明治	佐藤利兵衛‖北葛飾郡幸松村大字小潤観音裏		墨刷		1枚
59	株式会社第一銀行名古屋支店営業広告	明治	第一銀行名古屋支店‖名古屋市伝馬町四丁目	扶桑新聞社	活字		1枚
60	中風不発用心薬引札		藤岡忠兵衛‖京都不明門通七条上ル町		墨刷		1枚
61	春雨傘貼交絵引札	明治34年４月	福田熊次郎	福田熊次郎‖日本橋区長谷川町十九ハンチ	色刷	国周	3枚続
62	養豚社引札	明治４年辛未	養豚社		活字		1枚
63	坐繰製糸改良広告	明治26年４月	萩原製糸場‖東京府八王子中野	横浜貿易新聞印刷部	活版		1枚
64	パノラマ図解	明治	日本パノラマ館‖浅草公園	秀英舎‖東京市京橋区西紺屋町廿六七番地	1部色彩		1枚
65	日蓮法難パノラマ図	明治	神田パノラマ館‖神田三崎町三丁目壱番地		1部色刷		1枚
66	日露戦争　旅順総攻撃図	明治	上野パノラマ館	一色活版所‖東京	活字		1枚
67・1	岩井善七店引札	明治	岩井善七‖大坂心斎橋筋北久太郎町北入		色刷	貞信	1枚
67・2	大西久左衛門店引札		大西久左衛門‖備中玉島湊		色刷	貞信	1枚
67・3	柿崎常七店引札	明治	柿崎常七‖兵庫本町通北仲町		色刷	清光	1枚
67・4	魚清引札		福永利平‖赤間関（下関）西南部町54番地		色刷		1枚
67・5	磯屋直兵衛店引札		磯屋直兵衛‖周防室積港		色刷		1枚
68	明治十一年太陽略暦引札	明治10年	北国屋八兵衛‖大坂うつぼ	東京大阪頒暦商社	1部色刷		1枚
69	郵船会社汽船表	明治	田中武兵衛支店‖伊勢国四日市蔵町		色刷		1枚
70	かなや引札		尾澤善輔‖京都柳馬場通六角下ル町西側		1部に色刷		1枚
71	松井田駅市場引札	明治10年７月	松井田駅市場		墨刷		1枚
72	醤油広告	明治18年７月	関口八兵衛‖茨城県常陸国信太郡鳩崎村	栗山石印‖東京銀座四丁目拾四番地	（石版）		1枚
73・1	明治十五年略暦引札	明治14年12月28日	馬場八十八	真田善次郎‖石川県富山	一部色刷		1枚
73・2	明治十五年略暦引札	明治14年12月28日	馬場八十八	真田善次郎‖石川県富山	一部色刷		1枚
73・3	明治十五年略暦引札	明治14年	板房吉	頒暦社、林立守	一部色刷		1枚
73・4	明治十五年太陽略暦引札	明治14年12月28日	四十川藤七	林字平‖石川県富山	一部色刷		1枚
73・5	明治十六年略暦引札	明治15年11月13日	吉田鶴次郎	森井政助‖大阪南区心斎バシ二丁目三十一ハンチ	一部色刷	貞信	1枚
73・6	明治十六年太陽略暦引札	明治15年11月25日	寺山駒蔵	大江万里‖新潟町吉町通二番町二十五番地	一部色刷		1枚
73・7	明治十六年略暦引札	明治15年11月15日	谷本嘉平（もとや）	広瀬与作‖石川県金沢区上近江町四番地	一部色刷	国貞	1枚
73・8	明治十七年略暦引札	明治16年12月1日	大石庄吉	松浦善右衛門‖大阪府東区内平野町二丁目三十五番地	一部色刷	貞信	1枚
73・9	明治十七年略暦引札	明治17年1月2日	長田嘉助	井上由太郎‖下京区第十二組京極町	一部色刷	月洲	1枚
73・10	明治十七年略暦引札	明治16年11月28日	信濃屋増五郎‖越中東岩瀬湊	青山成道‖新潟県	一部色刷		1枚
73・11	明治十七年略暦引札	明治16年12月14日	敦賀屋市次郎‖越後新潟港上大川前通拾番町	安宅良三郎‖新潟区本町通九番丁七番地	一部色刷		1枚
73・12	明治十八年略暦引札	明治17年11月1日	本保八蔵‖越中伏木港浜町	林友太郎‖富山県富山	一部色刷		1枚
73・13	明治十八年略暦引札	明治18年1月16日	ともや瓢口卯八郎‖備中笠岡湊	大熊浅吉‖備中玉島	一部色刷		1枚
73・14	明治十八年略暦引札		米光屋亀田圓平‖加賀国美川港	近広堂‖金沢近江町	一部色刷		1枚
73・15	明治十九年略暦引札	明治18年11月2日	北国屋槻山善兵衛‖赤間関西南部町	林友太郎‖上新川郡富山石倉町十四番地	一部色刷		1枚
73・16	明治十九年略暦引札	明治18年11月26日	石原平右衛門‖越後国直江津港	青山定治‖中頚城郡高田上田通町十二番地	一部色刷		1枚
73・17	明治十九年略暦引札	明治18年12月16日	もと屋嘉平‖加賀国石川郡水嶋駅	広瀬与作‖石川県金沢区上近江町四番地	一部色刷		1枚

日本実業史博物館準備室旧蔵資料のうち「広告の部」資料について（原島）

仮番号	表　題	発行年月日	発行者‖発行者住所	出版人‖出版人住所	印刷様式	画家‖作者	数量
73・18	明治二十三年略暦引札	明治22年11月23日	田村喜三松‖能登国七尾港	錦広堂（熊本甚四郎）‖富山市古鍛冶町十七番地	一部色刷		1枚
73・19	明治十八年略暦引札	明治17年	もと屋嘉平‖加賀国石川郡水嶋駅	近広堂‖金沢近江町	一部色刷		1枚
74	玉澤善吉店引札		玉澤善吉‖下総佐原上川岸	（彫工）豊島‖大伝馬二丁目	墨刷	貞房	1枚
75	魚船号	明治	魚船組/岡茂回漕店/松本回漕店‖明石港旧御茶屋橋北詰/大阪市西区江戸堀西北橋南詰/大阪市南区長堀橋北詰		一部印刷		1枚
76	（仏語紙片）						1枚
77	正藍大安染広告		元紺屋イナゴ　小林　藤太郎‖天羽郡大貫村岩瀬		活版		1枚
78	萬染物開業広告	明治24年10月２日	元藍屋　紺兼‖南埼玉郡武里村大字大畑	並木活版所‖東京　浅草並木町	活版		1枚
79	蒸気船引札	明治	柏木健蔵‖横浜南仲通三丁目		一部印刷		1枚
80	看板広告札原価表	明治	資生堂‖東京本町壱丁目		活字		1枚
81	（日表広告図枠案内）	9月	広告社‖東京銀座二丁目一番地		活字		1枚
82	（改良農具図解）	明治18年10月	福島県開成山農学校		活字、図版		1枚
83	大丸屋小川町開店引札	明治21年６月	大丸屋惣平‖神田小川町十四番地		1部印刷	梅堂国政	1枚
84	（書物錦絵問屋　大黒屋引札）	明治24年	松木平吉‖東京市日本橋区両国吉川町二番地		色刷		1枚
85	籾早播器械引札	明治	大日本国益社　稲村清次郎‖東京市本所区番場町七拾弐番地		活字		1枚
86	高野漆合名会社ポスター	明治	高野漆合名会社‖東京市日本橋区馬喰町二丁目二番地	木村健吉‖東京京橋際水谷町七番地	石版		1枚
87	質物預り証	申７月12日	（差出人）岩本　（宛名人）二ノ坂安太郎		墨書		1枚
88	富士美賀多袋		大坂屋八右衛門‖江戸京橋銀座三丁目		墨刷		1枚
89-1	御徒町病院ちらし	明治	御徒町病院‖下谷区竹町一三七番地		活字、薄赤色紙		1枚
89-2	柳島病院ちらし	昭和8年	柳島病院‖（市電柳島終点下車）		活字		1枚
89-3	藤屋薬局福引ちらし	昭和7年	藤屋薬局‖浅草区仲町大通り四ツ角		活字、上下を青・赤に色分けで印刷		1枚
90-1	沿線名所案内	昭和7年8月	小田原急行鉄道‖東京市外千駄ヶ谷町千駄ヶ谷新田八六二	鉄道商工社	色刷		1枚
90-2	団体旅行募集ちらし	昭和8年2月	日本探勝協会‖東京市麹町区丸の内東京ステーションホテル内		活字		1枚
90-3	週末温泉列車ちらし		東京鉄道局		活字		1枚
91-1	酒売出ちらし		本高田商店‖京橋区南新川		色刷		1枚
91-2	□食堂開店ちらし	昭和7年12月	□食堂‖浅草雷門東武ビル内1階3号		活字、赤色紙		1枚
91-3	三升ちらし		（浅草）花川戸四二	マノ印刷‖（浅草）馬道六ノ七	活字		1枚
91-4	ミヤマ新装開店ちらし		ミヤマ‖浅草雷門前		活字、黄色紙		1枚
91-5	フルーツパーラー八百鉄ちらし	1933年	八百鉄‖河原町松原上ル西側		活字		1枚
92	宮津町旅館引札	明治36年	宮津町旅館26店		一部色刷		1枚
93	東京府下豊多摩郡渋谷村字中渋谷　角谷製綿工場之真景	明治			錦絵	とりせん	1枚
94	大日本金満家一覧鑑	明治41年１月15日印刷　同20日発行	法令館本店‖大阪市南区松屋町三十九番地	榎本松之助‖大阪市南区松屋町三十九番地	活字		1枚
95	陀羅尼助ちらし		藤井善右衛門‖和州吉野山		木版		1枚
96	あぶみや引札	（明治）	あぶミや太右衛門‖京都三条通大はし東づめ		墨刷		1枚
97	新案征露戦局双六	明治38年１月１日発行	博文館‖東京市日本橋区本町三丁目	三間印刷所‖東京銀座三丁目	石版	尾竹国観	1枚
98	チェスター油ちらし		「タイド、ウォーター」石油会社‖亜米利加合衆国「ニュー、ヨーク」府		墨刷		1枚
99-1	志村商店ちらし		志村商店‖（浅草）千束町本通り小松橋		活字		1枚
99-2	松葉屋呉服店ちらし	昭和8年	松葉屋‖浅草雷門ちんや通		活字		1枚
99-3	浅草中部聯盟店ちらし		浅草中部聯盟店（6店）	三光社	活字		1枚
99-4	大丸屋呉服店ちらし		大丸屋‖浅草橋		活字		1枚
99-5	浅草松屋ちらし	昭和7年11月	浅草松屋‖浅草		活字		1枚
99-6	雷門市場ちらし		雷門市場‖浅草雷門		活字		1枚
100	第四　北海道移住手引草	明治36年２月13日発行	北海道協会支部‖北海道石狩国札幌区北三條東三丁目一番地	三秀舎活版所‖東京市神田区美土代町二丁目一番地	活字		1枚
101	鎌倉江島一覧図	明治22年５月25日	相良国太郎‖相模国鎌倉郡東鎌倉村雪下十六番地	片山国太郎‖東京日本橋区本銀町二丁目十番地	銅版		1枚
102	南京寧波商船之真図	文政９年正月	塩富川■写		筆写		1枚
103	両国橋割烹青柳引札	明治14年３月１日開業	割烹老舗　青柳‖両国橋東		色刷	梅堂	1枚
104-1	多嘉木虎之助	（文化12～天保13ころ）		坂本丁川口板	錦絵	一勇斎国芳	1枚
104-2	泰平御固				墨刷		1枚
104-3	南海地震瓦版	嘉永7年			墨刷		1枚
104-4 104-5	信州地震瓦版	弘化4年			墨刷		2枚
104-6	（しん板車尽し）	明治15年10月	児玉弥吉‖本所区横網町		錦絵	芳藤	1枚

仮番号	表　題	発行年月日	発行者‖発行者住所	出版人‖出版人住所	印刷様式	画家‖作者	数量
105	汽車時刻表	大正元年９月	朝鮮総督府鉄道局		活字		1枚
106	秋蚕種製造業人名表	明治34年７月	上原歌次郎‖長野県東筑摩郡神林村		墨刷		1枚
107	（紙袋ヵ）				黒印		1枚
108	大日本山梨農産社株式券状	明治13年12月15日	農産社		活字		1枚
109	諸国名所百景　伊予峯越鬼坂網	万延２年正月		下谷魚榮（魚屋栄吉）版	色刷	広重（2代）	1枚
110	東京名所　海運橋五階造真図	明治５年６月		伊勢屋兼吉‖東京南横町	色刷	国輝	3枚続き
111	（鯨見世物）		熊谷庄七‖小舟町三丁目十一番地		色刷	芳年	1枚
112	□回漕店並ニ諸問屋		泉喜七郎‖伊予三津桑町		色刷		1枚
113	時事新報絵びら	明治17年５月23日	時事新報社‖東京日本橋区通三丁目十一番地		色刷（錦絵）	揚州周延	1枚
114-1	初荷札		橋本農蚕機商会‖渋川町阿久津		色刷		1枚
114-2	初荷札見本				色刷		1枚
114-3	初荷札見本				色刷		1枚
114-4	初荷札見本				色刷		1枚
114-5	初荷札の見本				色刷		1枚
114-6	初荷札の見本				色刷		1枚
114-7	初荷札の見本				色刷		1枚
114-8	初荷札の見本				色刷		1枚
114-9	初荷札の見本				色刷		1枚
114-10	初荷札の見本				色刷		1枚
114-11	初荷札の見本				色刷		1枚
115	九段勧業場売出し広告	明治31年	九段勧業場		色刷		1枚
116	自動鉄道引札	明治23年６月		広文堂‖京橋区三十間堀一丁目三番地	活字、銅版		1枚
117	銘酒商標				色刷		6枚
118	銘酒商標						
118-1	白梅		山喜精撰吟造		色刷		1枚
118-2	白梅		山喜精撰吟造		色刷		1枚
118-3	焼酎		橋本精醸‖栃木町		色刷		1枚
118-4	白鷹				色刷		1枚
118-5	正宗		本家精醸		色刷		1枚
118-6	白菊		茂居醸造		色刷		1枚
118-7	白菊		茂居醸造		色刷		1枚
119	菓子商標		笠原與蔵‖東京神田区松枝町壱番地		色刷		1枚
120	荘所太兵衛店図		荘所太兵衛‖大阪南区鰻谷中之町四番地		色刷		1枚
121	年賀用複製引札		銭幣館		色刷	貞重	1枚
122	年賀用複製引札	昭和８年	銭幣館		色刷	一寿斎芳貞	1枚
123	年賀用複製引札	昭和11年	銭幣館		色刷	貞重	1枚
124	年賀用複製引札	昭和15年	銭幣館		色刷	一寶斎国盛	1枚
125	年賀用複製引札	昭和13年	銭幣館		色刷	美丸	1枚
126	年賀用複製引札		銭幣館		色刷	一勇斎国芳	1枚
127	年賀用複製引札		銭幣館		色刷	一勇斎国芳	1枚
128	かめ家団扇絵		加免家‖本郷大横町		銅版	圓活	2枚
129	松盛堂団扇絵		石田商店‖京橋区南伝馬町三丁目十四番地		銅版		1枚
130	藤井卯兵衛店引札		藤井卯兵衛‖大阪西区西道頓堀三丁目十番屋敷		色刷、銅版		1枚
131	栄光社蒸溜器引札	明治27年３月25日	栄光社‖東京市日本橋区大伝馬町弐丁目	醸造雑誌社‖東京市日本橋区蛎殻町弐丁目	石版		1枚
132	筆記法のしるべ		日本傍聴筆記学会事務所‖麹町区元園町一丁目二十四番地	開華堂‖京橋区錦屋町十四番地	銅版		1枚
133	旅宿引札		半助‖戎橋北詰		色刷		1枚
134	焼酎蒸溜器械引札	明治31年１月10日	筒井寅松‖東京市浅草区源訪町十四番地	高崎修助	色刷		1枚
135	堺屋商店引札	明治	堺屋商店‖東京浅草並木町		色刷		1枚
136	（住友銀行道頓堀支店開業案内）		住友銀行‖大阪市今橋四丁目	大阪大林帳簿製造所	色刷		1枚
137	（輸出向日本茶商標等）	明治			色刷		91枚
137-85	（海辺図）				色刷		
137-86	皇国製茶図会　第十七号	明治18年			色刷		
138	東京府庁指令書	明治10年９月23日			墨書		1枚
139	内国勧業博覧会場図	明治10年	小西清兵衛‖東京小石川源訪町六番地		色刷銅版		1枚
140	理髪機械櫛引札	明治19年２月８日特許	発明者　斎藤榮之助　発売人　西村吉兵衛‖日本橋区元大工町十三番地		墨刷		1枚
141	益壽糖袋				色刷		1枚
142	枡市楼引札図		桝屋市兵衛‖大阪道頓堀日本橋南詰		色刷	魁春亭真芳	1枚
143	遊女大安売引札	嘉永４年２月下旬	万字屋茂吉‖新吉原角町		墨刷		1枚
144	吉野屋助七引札	嘉永元申年	吉野屋助七‖江戸馬喰町肴店		墨刷		1枚
145	目鏡屋引札		みのや平六‖浅草駒形堂前		墨刷		1枚

仮番号	表　題	発行年月日	発行者‖発行者住所	出版人‖出版人住所	印刷様式	画家‖作者	数量
146	菓子屋引札		船橋屋攝津大掾　藤原織江‖下谷広徳寺前稲荷町		一部色刷	引札文作者：仮名垣魯文（鈍亭）	1枚
147	清風楼報帖	辰6月12日見世びらき	清風楼　大黒屋文治郎‖真土山（待乳山）下		一部色刷	引札文作者：柳下亭種員	1枚
148	新製御菓子開店報條		町田伊勢大掾‖東都瀬戸物町		墨刷	引札文作者：山東京山	1枚
149	海苔所引札		久保田屋伊勢‖江戸日本橋せともの町		墨刷	引札文作者：柳下亭種員	1枚
150-a	大黒屋引札		大黒屋河内大掾‖江戸橋通四日市木戸際		青色刷		1枚
150-b	菓子店開店引札		町田伊勢大掾‖東都せともの町		色刷	歌川豊国‖引札文作者：山東京山、市川三升	1枚
151	菓子屋引札		遠月堂緑谷　平笹堤‖浅草広小路火之見下		墨刷		1枚
152	菓子屋引札		桔梗屋伝兵衛‖今川橋通り本銀町三丁目		墨刷		1枚
153	菓子屋引札	巳6月	豊田大和‖大伝馬弐丁目		天紅	引札文作者：永寿高	1枚
154	芝居桟敷大安心		成田屋茂吉		墨刷		1枚
155	漬物屋報裏		伊勢屋喜右衛門‖浅草駒形町		一部色刷		1枚
156	御銘酒附	嘉永	松屋広瀬‖本町二丁目		墨刷	一雄斎国輝	1（袋つき）
157-1	菓子銘しおり		こたい升屋			引札文作者：しう朝	1枚
157-2	親玉おこし袋	丑初春	牡丹亭金升‖甲府八日町壱丁目		一部色刷	国芳	1枚
158	菓子屋報条	卯の春	若林源繁樹‖南伝馬町二丁目		一部色刷		1枚
159	菓子屋引札		町田伊勢大掾‖瀬戸物町		墨刷		1枚
160-a	柳好亭引札	10月17日より	柳好亭‖西がし		墨刷		1枚
160-b	狼若煎餅引札		柏屋金五郎‖浅草山の宿町東側		墨刷	引札文作者：柳下亭種員	1枚
161	菓子屋引札	辰9月	児嶋屋吉兵衛‖南伝馬町三丁目		墨刷		1枚
162-a	佃煮店引札	8月上旬	亀屋和泉‖せともの町		墨刷		1枚
162-b	すし店引札	11月朔日	玉の井留五郎‖本石町四丁目北新道		墨刷		1枚
163	菓子屋引札	寅年	大和屋近江掾　大坂屋森房‖高砂町		墨刷		1枚
164-1	霊方萬金丹本家繁昌之図		野間国彦	山本伊三郎衛充‖京都	銅版		1枚
164-2	嘉多古しおり		煎芽堂		墨刷		1枚
165	氷月亭口条	午11月15日	氷月亭‖浅草弁天山		墨刷（天紅）		1枚
166-1	巴屋引札		巴屋六左衛門‖信州小諸宿本町		一部色刷		1枚
166-2	柳好亭引札	4月11日	柳好亭‖日本橋西河岸		一部色刷	山々亭有人（条野採菊）	1枚
167	綿屋直十郎店引札		綿屋直十郎‖江戸田所町		墨刷		
168	名古屋楼引札	10月朔日	名古屋楼栄吉‖小伝馬町三丁目西側中程		一部色刷		1枚
169-1	美濃屋引札	10月朔日より	美濃屋文吉‖鉄砲町		墨刷		1枚
169-2	中村屋引札	11月28日	中村屋平吉‖両国尾上町		墨刷		1枚
170	広屋引札	辰11月	広屋重次郎‖銚子荒野		墨刷		1枚
171	菓子屋引札		町田伊勢大掾‖瀬戸物町		黄紙		1枚
172	菓子屋引札		高橋屋太兵衛‖本石町四丁目		墨刷		1枚
173-1	武田太郎兵衛店引札		武田太郎兵衛‖大阪かうらいばし二丁目		墨刷		1枚
173-2	山本屋引札		山本屋勘太郎‖大阪本町ばし西詰南		墨刷		1枚
174	新製御菓子報條	辰年初夏	船橋屋攝津大掾藤原織江‖人形町通り西側中程		墨刷	引札文作者：菊寿老人	1枚
175	美人香引札		ひろせしうあん‖日本橋とおり三丁め		墨刷		1枚
176-1	槌屋引札	4月2日開店	槌屋金次郎‖人形町木戸ぎわ		墨刷	引札文作者：川栖舎初蝶	1枚
176-2	いつみや引札		いつみや勘十郎‖（江戸）さかい町（堺町）		墨刷		1枚
177	菓子屋引札	6月21日より	松林堂‖室町二丁目角		墨刷		1枚
178	測量器引札		玉屋吉次郎‖江戸横山町三町目		墨刷		1枚
179	大隈源助店引札		大隈源助‖江戸浅草茅町弐丁目		墨刷		1枚
180-1	舛屋引札	戌午正月2日他	桝屋市兵衛‖大阪どうとん堀日本橋南詰芝居町		一部色刷		1枚
180-2	煙管屋引札		はりまや平八郎‖大阪四ツ橋西南詰少シ南へ入		墨刷		1枚
181-1	御影堂扇子之略記		新善光寺		墨刷		1枚
181-2	うそのかわ見切物大安売引札		うそつきや書兵衛‖鉄砲町		墨刷		1枚
182	冨新亭引札	（11月朔日ヨリ）	冨新亭‖馬喰町三丁目　馬場出店		墨刷	引札文作者：芦丸	1枚
183-1	商家商標		長崎屋摂津掾‖上野御成道角		墨刷		1枚

仮番号	表　　題	発行年月日	発行者‖発行者住所	出版人‖出版人住所	印刷様式	画家‖作者	数量
183-2	商家商標		さくら寿し‖浅尾		墨刷		1枚
183-3	商家商標		大橋太郎次郎‖本町四丁目		色刷		1枚
183-4	商家商標		四ツ橋‖川越高沢町		墨刷		1枚
183-5	商家商標		保坂山城大掾藤原教推‖東都牛込神楽坂上岩戸町		色刷		1枚
183-6	商家商標		桔梗屋吉久‖須田町		墨刷		1枚
183-7	商家商標		大和屋圖水‖赤坂裏伝馬町三丁目		墨刷		1枚
183-8	商家商標		遠月堂塚谷平筮堤‖浅草御門外		色刷		1枚
183-9	商家商標		静寿軒‖牛込肴町		色刷		1枚
184-1	商家商標		白雲堂		墨刷		1枚
184-2	商家商標		相模屋山城‖日本橋万町		墨刷		1枚
184-3	商家商標		風月堂‖両国若松町		色刷		1枚
184-4	商家商標		伊勢徳砂糖店‖両国橋通吉川町		色刷		1枚
184-5	商家商標		大黒屋河内大掾‖江戸橋通四日市		墨刷		1枚
184-6	商家商標		（不明）‖ふきや町		墨刷		1枚
184-7	商家商標		風月堂‖南伝馬町弐丁目		墨刷		1枚
184-8	商家商標		鈴木若狭掾‖赤坂一ツ木町		色刷		1枚
184-9	商家商標		白雲堂鶴屋万治郎‖小日向水道町中程		墨刷		1枚
184-10	商家商標		大和屋圖水‖赤坂裏伝馬町三丁目		黄紙		1枚
185	坂東亀蔵口上書		坂東亀蔵		墨刷		1枚
186-1	海藤花引札		左海源‖明石舞子		墨刷		1枚
186-2	魚屋引札		魚屋金蔵‖馬喰町三丁目		墨刷		1枚
187	児林堂引札		児林堂‖上野山下こま廻し竹沢のよこ丁		墨刷		2枚
188	本元万病鉄袋円引札	7月9日開店	勧学屋大助霊薬弘所‖江戸　東叡山池之端		墨刷		1枚
189	銘茶問屋引札	文化7年庚午11月	井筒屋利助‖両国やげん堀不動前角		墨刷		1枚
190	御茶所引札		八幡屋覚右衛門‖江戸日本橋通本石町十軒店		墨刷		1枚
191	茶問屋引札		伊勢屋嘉兵衛‖江戸芝口三町目		墨刷		1枚
192	御茶所引札	明治2巳巳2月	大鳳軒　豊田甚右衛門‖東京照降町		墨刷		1枚
193	葉子屋引札		町田伊勢大掾‖瀬戸物町		筆写		1枚
194	（出火戯文瓦版写）	文政12年丑3月21日			筆写		1枚
195	大黒屋引札		大黒屋清兵衛‖幸手宿		墨刷		
196-1	塩仲買広告	明治13年6月4日	海老沢平兵衛‖東京小網町二丁目十一番地	共遊舎‖蠣殻町壱丁目三番地	活字印刷		1枚
196-2	中村屋広告	明治	中村屋忠兵衛‖横浜鉄道前尾上町六丁目		活字印刷		1枚
196-3	製藍社引札		製藍社‖東京下谷広小路二十		墨刷		1枚
197	第四十一国立銀行開業広告	明治11年10月1日	第四十一国立銀行‖栃木県下橡木倭町		活字印刷		1枚
198	源氏香引札	明治16年2月	中島屋百助‖東京浅草駒形町		活字印刷		1枚
199-1	吉野屋引札	明治	光月本店　吉野屋藤蔵‖東京市浅草区茅町壱丁目		一部色刷	引札文作者：骨皮道人	1枚
199-2	吉野屋引札	明治	光月本店　吉野屋藤蔵‖浅草区瓦町十四番地		一部色刷	玉英‖引札文作者：骨皮道人	1枚
200-1	山形屋引札		山形屋窪田惣八‖東京府下日本橋区里俗釘店室町壱丁目十一号		銅版		1枚
200-2	葉子銘しおり		こたい升屋		色紙使用	引札文作者：しう朝	1枚
200-3	升屋引札	丑正月	升屋太郎右衛門‖甲府八日町壱丁目		墨刷		1枚
201	風月堂広告	明治14年	風月堂　米津松造‖東京府下日本橋区両国若松町	青山印刷‖東京々橋区木挽町三丁目二番地	活字印刷		1枚
202	中屋引札		中屋源蔵‖栃木倭町壱丁目		墨刷		1枚
203	柳屋引札		柳屋外池五郎三郎‖東京日本橋通二丁目		墨刷		1枚
204	吉川製量器通価表	明治30年1月1日	量器製作所　吉川三郎‖福島県北会津郡若松町大字西名子屋町六十一番地		活版		1枚
205	改正栃木製量器通価表	明治26年	量器製作所　毛塚源蔵‖栃木県栃木町		活字印刷		1枚
206	東京荷物運送酔下問屋引札	明治8巳亥年2月	佐野屋半右衛門‖小舟町二丁目		墨刷		1枚
207	明治十二年略暦引札	明治12年1月日	尾張屋源吉‖東京御蔵前森田町	松木平吉‖吉川町二番地	色刷		1枚
208	旅人宿引札	（明治）	近江屋善兵衛‖東京日本橋区新蔵町十八番地		墨刷		1枚
209	踏上げ水取農道具引札	（明治）	澡水器工夫発明人植松藤平‖姫路中呉服町		墨刷		1枚
210	乾物所引札				色刷		1枚
211	海産物荷積問屋引札	（明治）	荒川和吉‖大阪中之島七丁目三番邸港橋北詰北へ入		色刷		1枚
212	鰹節商引札		井上定治郎‖大阪鰹座		色刷	豊岳	1枚
213	鶏卵鰹節問屋引札		高岸桑助‖大阪市西区朝上通二丁目		色刷	豊岳	1枚
214	北海産物引札		小林熊七‖大阪市朝中通弐丁目		色刷	豊岳	1枚
215	海産商引札		三好松五郎‖大阪朝中通弐丁目		色刷		1枚

仮番号	表　題	発行年月日	発行者‖発行者住所	出版人‖出版人住所	印刷様式	画家‖作者	数量
216	鶏卵商引札		今津治助‖大阪鰹座白髪橋	藤樹‖大阪市西区新町通三丁目	色刷		1枚
217	鶏卵鰹節商引札		山田庄助‖大阪市西区新町南通四丁目		色刷	貞信	1枚
218	鰹節商引札		鈴木久八‖大阪市西区靭中通壱丁目		色刷	花友	1枚
219	海産物問屋引札		桑田商店‖大阪市靭中通二丁目		色刷	豊岳	
220	浮粉製造所引札	明治23年12月9日	岡田利助‖大阪市北区西堀川堀川橋西詰北へ入	瀬原捨松‖大阪市東区本町四丁目廿七番屋敷	色刷	貞信	1枚
221	乾物問屋引札		浅田丑松‖大阪市南区難波市場		色刷		1枚
222	乾物問屋引札		浅田伊三郎‖大阪市南区難波市場筋角		色刷	狩野祐勢政信	1枚
223	台湾烏竜茶ラベル（FORMOSA OOLOONG）	明治	MOURILYAN.HEIMANN&Co. TAMSUI		色刷		15枚
224	日本茶ラベル	明治			色刷		56枚
225-1	廻漕店引札	明治	平井小市‖大阪高麗橋東詰		色刷		1枚
225-2	貨物運輸店引札	明治	八木正左衛門‖山城木津本町		色刷		1枚
225-3	廻漕店引札	明治	田中半七‖大阪天満橋北詰東川岸		色刷		1枚
225-4	廻漕店引札	明治	橋村支店‖大阪今橋東詰		色刷		1枚
225-5	明治廿二年略暦引札	明治21年	田中廻漕店‖大阪天満橋北詰東川岸		色刷		1枚
225-6	荷物運送所引札	明治	稲田弥平治‖南山城木津町		色刷		1枚
225-7	貨物運輸店引札	明治	八木正左衛門‖山城木津浜		色刷	月華斎清光	1枚
225-8	荷物運送所引札	明治	稲田弥平治‖山城木津浜		色刷		
226	大日本帝国貨幣古今集	大正5年6月8日発行	秋好善太郎‖東京淀橋町柏木百二十八番地	東洋印刷株式会社‖東京市芝区愛宕町三丁目二番地	色刷		1枚
227	大日本帝国紙幣古今集	大正4年4月3日	秋好善太郎‖東京淀橋町柏木百二十八番地	東京印刷株式会社‖東京市日本橋区兜町二番地	色刷		1枚
228	蓑養守護神　衣襞明神真影				色刷	引札文作者：曲亭陳人	1枚
229	（琉球　歳徳神）				肉筆彩色		
230	東京第壱名所　日本橋之真景	明治25年3月25日出版	永松作之助‖日本バシ区室町三丁目十バンチ		錦絵	楊斎延一	1枚
231	経済教授資料標本掛図（紙幣）	明治44年11月8日出版	峯間信吉	印行社‖東京市本郷区本郷四丁目廿番地	単色		1枚
232	経済教授資料標本掛図（紙幣）	明治44年11月8日出版	峯間信吉	印行社東京市本郷区本郷四丁目廿番地	単色		1枚
233	経済教授資料標本掛図（紙幣）	明治44年11月8日出版	峯間信吉	印行社東京市本郷区本郷四丁目廿番地	単色		1枚
234	経済教授資料標本掛図（手形及小切手）	明治44年11月8日出版	峯間信吉	印行社東京市本郷区本郷四丁目廿番地	色刷		1枚
235	経済教授資料標本掛図（公債証書）	明治44年11月8日出版	峯間信吉	印行社東京市本郷区本郷四丁目廿番地	色刷		1枚
236	経済教授資料標本掛図（貨幣）	明治44年11月8日出版	峯間信吉	印行社東京市本郷区本郷四丁目廿番地	単色		1枚
237	経済教授資料標本掛図（大蔵省証券、株券）	明治44年11月8日出版	峯間信吉	印行社東京市本郷区本郷四丁目廿番地	色刷		1枚
238	経済教授資料標本掛図（公債証書、四分利附）	明治44年11月8日出版	峯間信吉	印行社東京市本郷区本郷四丁目廿番地	色刷		1枚
239	御軍用金御分銅図				彩色		1枚
240	弗箱広告	明治15年3月改正	山田米吉‖東京銀座三丁目三番地	愛善社‖銀座弐丁目	活字印刷		1枚
241	ますゐ香油引札図		ますゐ亦兵衛‖大坂新町通弐丁目西口		色刷		1枚
242	八仙薬房各薬				色刷	広重	1枚
243	新古酒袋仕入所引札	明治10年	越後屋定次郎‖大坂北濱元梶木町御霊筋		一部色刷		2枚
244	祭礼用銘提灯引札	（明治）	いなばや‖島之内太左衛門橋北詰北へ入	西村■■堂‖大坂相生橋北	2色刷	■斉	1枚
245	三味線細工所引札		まつ亀‖ちつかい道すじ		色刷		1枚
246	千金丸看板ビラ	（明治）	宝盛社‖大阪		一部色刷		1枚
247	かもじ屋引札	（明治）	寺澤覚兵衛‖大阪市		色刷		1枚
248	酒道具店引札図		蓋屋八兵衛‖大阪道修町渡辺筋角		色刷		1枚
249	歌舞伎石鹸引札図		尾崎支店‖東京横山町		一部色刷		1枚
250	琴三味線糸細工處所引札		三木屋太兵衛‖（大坂）島之内心斎橋うなぎ谷角より南へ五軒目		墨刷		1枚
251	明治五壬申略暦引札	明治4年	笠屋久右エ門‖摂州　住吉安立町五丁目		一部色刷		1枚
252	薬石鹸引札図	（明治）	開真社‖大阪立売堀南通四丁目		一部色刷		1枚
253	神寿散広告		傑光薬室　石田勝秀‖京都五條橋東二町目		一部色刷		1枚
254	延齢丸引札		別所平四郎‖伊勢久居		一部色刷		1枚
255	にほひ袋引札図		古香堂‖京都四条通小橋西		一部色刷		1枚
256	健胃乳涌散引札		健生堂‖西讃州豊田郡姫濱		墨刷		1枚
257	明治十四年略暦引札	明治14年	笠屋久右エ門‖摂州　住吉安立町五丁目		色刷		1枚
258	東京下駄種問屋仕切相場表	明治27年12月	東京下駄種問屋事務所		墨刷		1枚
259	身上吉凶鑑訂引札		川辺蓑神‖深川森下町いよ橋ぎハ角屋敷		墨刷		1枚

仮番号	表　　題	発行年月日	発行者‖発行者住所	出版人‖出版人住所	印刷様式	商家‖作者	数量
260	教育参考最新輸入動物会	(明治)	宮城		墨刷		1枚
261	八百久引札	明治34年	八百久‖内藤新宿壱丁目六十五番地		色刷		1枚
262	毒掃丸引札	(明治)	山崎帝国堂		色刷		1枚
263	鴨下眼鏡店引札	(明治)	鴨下道太郎‖東京浅草公園　仲見世煉化東側　四十三号		墨刷		1枚
264	中谷安太郎店引札	酉４月３日開店	中谷安太郎‖金沢区片町五番地		一部色刷		1枚
265	駿河町越後屋引札		越後屋‖するか町		色刷		1枚
266	小沢源右衛門引札		小澤源右衛門‖兵庫鍛冶屋町三十五番地		色刷	基春	1枚
267	脾肝薬王円引札		石田勝秀‖京都五條橋東二丁目		色刷		1枚
268	明治十九年略暦引札	明治19年	羽澤店‖西京四条寺町西江入	七宝堂‖寺町蛸薬師角	色刷	広信	1枚
269A	奇応丸引札		西村巽洋軒‖京都三条通室町西入町南側		色刷	瑞彦	1枚
269B	薬用阿片購入之證	明治10年	秋山‖安房郡長須賀村五番地		墨刷		1枚
270	滝村商会引札	(明治)	滝村松之助‖大阪南区日本橋北詰北入東側		色刷	■■	1枚
271	近江八景横民發計	明治11年		福田熊治郎	色刷		2枚続き
272	東京開化名勝　海運憤銀行	明治21年２月８日出版	荒川藤兵衛‖日本橋区馬喰町二丁目九番地	田中仙次郎‖本所区若宮町百九十三番地	色刷	竹葉	1枚
273	東京名所　第六	明治34年５月11日発行	藪崎芳次郎‖東京市京橋区築地二丁目五番地		写真		1枚
274	東京名所　第七	明治34年５月11日発行	藪崎芳次郎‖東京市京橋区築地二丁目五番地		写真		1枚
275	東京名所　其八	明治31年３月24日発行	四方堂上條與茂太郎‖東京日本橋区平松町九番地	小川写真製版所‖東京市京橋区日吉町十三番地	写真		1枚
276	東京名所　第九	明治34年５月18日発行	藪崎芳次郎‖東京市京橋区築地二丁目五番地		写真		1枚
277	東京名所　其五	明治31年３月24日発行	四方堂上條與茂太郎‖東京日本橋区平松町九番地	小川写真製版所‖東京市京橋区日吉町十三番地	写真		1枚
278	東京名所　第二	明治34年５月３日発行	藪崎芳次郎‖東京市京橋区築地二丁目五番地		写真		1枚
279	東京名所　其一	明治31年３月24日発行	四方堂上條與茂太郎‖東京日本橋区平松町九番地	小川写真製版所‖東京市京橋区日吉町十三番地	写真		1枚
280	国際写真情報　関東大震災号	大正12年10月10日発行	国際情報社‖東京市赤坂区青山南町六丁目百八番地		写真		1冊
281	関東大震災被災写真		大正12年		写真		1枚
282	関東大震災被災写真		大正12年		写真		1枚
283	関東大震災被災写真		大正12年		写真		1枚
284	関東大震災被災写真		大正12年		写真		1枚
285	関東大震災被災写真		大正12年		写真		1枚
286	関東大震災被災写真		大正12年		写真		1枚
287	関東大震災被災写真		大正12年		写真		1枚
288	関東大震災被災写真		大正12年		写真		1枚
289	関東大震災被災写真		大正12年		写真		1枚
290	関東大震災被災写真		大正12年		写真		1枚
291	米国日本協会主催晩餐会写真	1915年12月2日	1915年12月2日		写真		1枚

注記：□は商標などを示す。
　　■は難読字を示す。